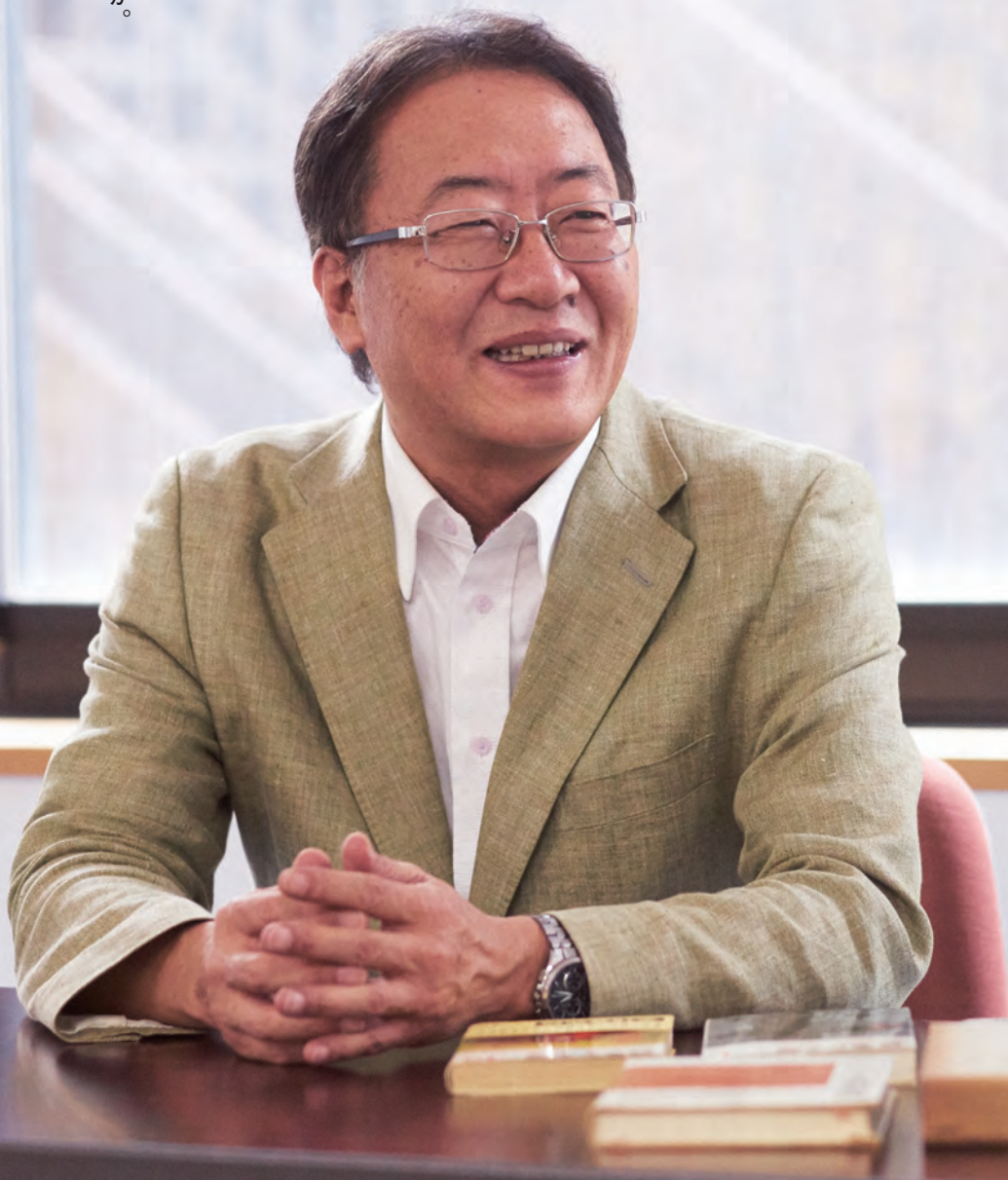


# 山本博文

(日本近世史学者)

## 私をつくった 5冊の歴史書

山本博文の歴史観を形成したのは、少年期から青年期にかけて親しんだ小説や伝記だったという。物語を楽しむ小説と、史実を追求する歴史研究書。それぞれの読書体験を通して、山本は何を学び、何を得たのだろうか。自ら選んだ珠玉の五冊を傍らに語る。



歴史の魅力は、その物語性にある。そう気づかせてくれたのが、高校のときの世界史の先生と、予備校時代の日本史の先生でした。特に予備校の先生は講談調で非常に詳しく面白く話してくれました。

もともと小さいころから興味があったのは文学でした。幼いころは、歴史上の人物の伝記を一生懸命読んでいましたが、中学生になると、当時、割腹自殺をした三島由紀夫にはまり、彼の小説はほとんど読みました。高校時代にはドストエフスキーとか、いわゆる文学青年が手を出すようなもの、遠藤周作、安部公房、大江健三郎といった純文学も乱読したものです。

当時はまだ歴史学を専攻しようと思っていなかったのですが、純粹に小説として楽しんでいました。安部の小説などは内容をどこまで理解していたか疑問ですが、それでも「これを読んで理解しなければいけない」という思いで、一生懸命読んでいたのです。歴史小説では、司馬遼太郎や吉川英治などももちろん読みましたが、歴史家としての視点ではなく、あくまでも物語の面白さや、人間の描き方に魅力を感じていました。

その後、大学に入ってからでも文学青年は健在。ずいぶん小説を読みました。そのころから徐々

に、歴史の面白さもわかり始めたように思います。歴史学というのは、勉強を進めると着実に成果が積みあがっていく学問です。授業を受けて夢中になり、文学よりも歴史学を選ぶことになりました。

### 人間に光を当てる描き方

さて、本稿では私をつくった歴史書を五冊ご紹介していくわけですが、最初の二冊は中世・近世をテーマにした本ではなく、私が歴史の物語性を探究するきっかけとなった本です。

一冊目は、五味川純平の小説『戦争と人間』です。これは高校生のときに映画を見て、大学に入って間もないころに原作を読みました。物語の舞台となるのは、満州事変から日中戦争へ続く「戦争」の時代です。五代財閥の次男・五代俊介と、その友人の柘植進太郎少佐の二人を軸に、大きな時代の流れのなかで翻弄される人々を描いています。当時は近代史に興味があり、エドガー・スノーのルポルタージュなどもよく読んでいました。

『歴史と人間』は、大学の歴史の授業で推薦されて読みました。当時、論壇を賑わせていた「昭和史論争」を描いた作品です。一読して、「歴史

はやはり人間だ」と感じたのを覚えています。もともと文学の物語性に興味があったので、漠然と、社会制度の分析より、歴史家として人間自体を探索しようという気持ちになりました。

大学で近世史を専攻するか悩んでいるころに読んだのが、後に指導教官となる尾藤正英先生の『日本の歴史 19 元禄時代』です。この本は、各章ごとに従来の捉え方とは異なる歴史の見方を提示するのが特徴でした。例えば、「浮世」という言葉は「浮かれて暮らす」という意味で使われますが、中世ではこれを「憂世」と書きました。中世は苦しくて、近世は気楽というイメージがあるのですが、近世における浮世の事例をよく見ると、人間が活動できる限界のようところに線を引き、その範囲内で浮世を楽しむ。つまり、制約のある世の中だからこそ、せめて楽しく暮らそうという諦めの感情がそこに見えるのです。この本では、そういう指摘がいくつもあり、とても斬新で面白かった。ものの捉え方や事実をどう評価するかという点で、大きな影響を受けた一冊です。

学部に進んで卒論を書く際に読んだのが『幕藩制成立史の研究』です。著者の山口啓二氏の議論は、豊臣政権から徳川政権、つまり幕藩体制へと移行する過程を、戦国大名がいかにして